

「日本写真保存センター」調査活動報告(36)

—原爆被災を記録した写真原板の保存の意義を検証する—

写真保存センター委員会

■広島原爆投下直後を撮影した松重美人の 写真原板を収集

松重美人(まつしげ・よしと 当時、中国新聞社写真部員・中国軍管区司令部報道班員、32歳、1913～2005)の原爆投下直後の被災状況を捉えた写真原板の劣化を恐れていた写真保存センターでは、数年前から管理者の中国新聞社と保存の必要性を話し合っていたところ、2021年3月26日、広島市教育委員会が市の重要文化財として指定し、恒久的な保存を図ることを決めた。その待望の松重の写真原板が、この度「日本写真保存センター」に寄託され、長期保存することになった。

広島原爆投下直後の被災状況を伝える写真原板は、長らく松重自身で保管されていたため、写真原板の一部に経年劣化が見られ、管理者の中国新聞社から、「日本写真保存センター」の恒久的な保存に適した相模原の収蔵施設での保管を委ねられることになった。

日本写真家協会が「日本写真保存センター」を立ち上げてから15年になる。この間に山端庸介(やまはた・ようすけ 当時、西部軍管区報道班員、28歳、1917～66)が1945年8月10日に撮影した長崎原爆の凄惨な被爆状況を捉えた写真原板を含む308点をいち早く収蔵した。

今回、松重が1945年8月6日の午前11時過ぎから午後4時頃までに撮った、広島原爆直後の写真原板5点(6×6判)と、さらにその後見つかった被爆地の写真原板9点を加えて受け入れることにした。10月8日、中国新聞社の岡田浩一編集局長がこの14点の写真原板を保存センターに持参された。これにより被爆記録としての写真原板の重要性が広く認知され、保存

の意義がより一層確実なものになった。

原爆による被災状況を捉えた写真は米軍GHQのプレスコードで、1952年の講和条約締結まで公表することができなかった。これをすり抜けて公表したのが、中国新聞社の別会社『夕刊ひろしま』(1946年7月6日付)が掲載した松重の2枚だった。

私は38年前の1983年7月16日に、広島で松重氏にお会いしインタビューをした(会報64号掲載)。原爆が投下された日のことを次のように語った。「朝の6時ごろ空襲警報が解除され、市の中心から2.7キロメートルの翠町の自宅に帰り、朝食を終えて新聞社へ出勤する支度をしているとき、大量のマグネシウムが眼前で破裂したような青白い光で、一瞬何も見えなくなり、強烈な爆風で後ろの壁にたたきつけられた。」「すぐにミヤシックスとフィルム1本を持って新聞社へと出かけた。周りは爆風で倒れた家が燃えていたり、逃げ惑う人で大混乱。頭髪は焼けちぎれ、顔や腕、背中の皮が火ぶくれ、垂れ下がって地獄絵のようだった。」「写真を撮ろうとしたが、あまりの惨状で撮ることが出来なかった。やっと1枚シャッターを切ったが、2枚目はファインダーが涙で曇り切れなかった。」「その先へは火炎が激しくて進めなかった。フィルム現像は社の疎開先で皿現像し、水洗は近くの小川で行った。」という。「そのような状況下で処理したため、ネガに定着ムラやカブリ・傷が付いてしまった。」「戦後すぐに進駐軍が写真などを探していたため、フィルムは社に置かず自宅で保存していた。」と語り、「被爆の実態は残された写真で後世に伝えてほしい」と言い残されたことが思い出される。

保存センターには、千余年の歴史を負う由緒深い国宝をはじめとする重要文化財の法隆寺、東大寺、唐招提



① 1945年8月6日午前11時過ぎ、爆心地から南東約2.2キロの御幸橋西詰め。倒れた人、うづくまる男女、救護を受ける女学生、警官などが写っている。初出は中国新聞の別会社の「夕刊ひろしま」(1946年7月6日)。「LIFE」(1952年9月29日号)が「世紀の記録写真」原爆炸裂/全米初公開」と全世界に②とともに紹介。



② 午前11時過ぎ、被爆した人たちに変圧器用の油を塗って、痛みを抑える。



③ 午後2時ごろ、爆心地から約2.7キロの翠町の理髪店兼自宅。

寺などの奈良六大寺、大和古寺群を撮影した渡辺義雄、入江泰吉、坂本万七、小川光三ら 17 人の写真家が撮影した写真原板約三千六百点を岩波書店から収集して保存している。これらはわが国にとってかけがえのない貴重な文化財の写真群である。

原爆被災を捉えた松重の「ヒロシマ」と山端の「ナガサキ」の写真は、世界で初めて戦争で使われた原子爆弾による被爆記録であり、国はもとより世界の記憶遺産として末永く保存される必要が求められる。(記／松本徳彦)



④ 午後 2 時ごろ、爆風で吹き飛んだ窓枠。



⑤ 午後 4 時過ぎ、爆心地から南東約外の倒壊した建物は西消防署皆実出張所。2.3 キロの広島地方専売局前、被災者に「罹災証明書」を書く宇品署の警察官。『LIFE』誌に 1 頁大で掲載される。

※原爆写真の関連資料「歴史の証言—いま原爆写真は!」(会報 64 号:1983 年 9 月発行)、「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾—被爆から 70 年—」

写真展図録(2015 年 8 月 4 日～30 日、JCII フォトサロン)

■日本写真保存センター所蔵原板活用

1. テレビ番組での利活用

最近の日本写真保存センター(以下:保存センター)における所蔵原板の活用として特筆すべき点は、多くの人の目に触れるメディアへの画像提供が挙げられる。保存センターの所蔵する原板が社会的に意義のあるものであることを広く周知し、その価値が認められた。

2. J:COM への画像提供

放映日は東京地区として 2021 年 3 月 25 日(木)、同 3 月 30 日(火)、神奈川地区は 3 月 29 日(月)、3 月 30 日(火)の計 4 回放映が行われ、保存センターの原板からスキャンしたデジタル画像 7 点を提供した。画像の出典は、上野公園花見篇(名取洋之助)浅草寺宝蔵門篇(写真協会)、横浜港航空写真篇(吉田潤)、関内駅篇(浅野隆)。一例として関内駅篇では、1948～58 年に横浜市警、神奈川県警に勤務し写真撮影に従事した浅野隆「横浜・あのころ 飛鳥田市長」(1964 年ごろ撮影)から、関内駅周辺の過去の画像を提示し現在の場所がどこかをクイズ形式で視聴者に問いかけながら過去の様子を解説するもので、撮影後五十数年が経過した町の様子の変わり映えを紹介していた。



撮影者・浅野隆、撮影年月日・1964 年(推定)、撮影場所・神奈川県横浜市中区 横浜市庁舎

ケーブルテレビ大手 J:COM へは織作峰子会員の紹介で、J:COM 側で画像活用の企画が立ち上がったことによる。

3. NHK への画像提供

令和 2 年度事業として保存センターのデータベースは、国会図書館開設で国内の各機関が保有する多様なコンテンツ検索のポータルサイト「ジャパンサーチ」と連携をしたことで活動への問い合わせが増加傾向にある。それとの関連性は定かではないが、令和 3 年に NHK から「NHK スペシャル～新・ドキュメント太平

洋戦争 1941 開戦(前編)」への画像提供の依頼があった。

放映日は 2021 年 12 月 4 日に地上波で放映が行われ、NHK オンデマンドでも 2022 年 12 月 1 日まで配信されている。保存センターからは原板からスキャンしたデジタル画像 47 点を提供し、14 点が番組で使用された。画像の出典は主に、内閣情報部(内閣情報局)により編集・刊行されたグラフ誌『写真週報』で一般的にその目的は国内向けの国策宣伝とされている。番組の内容は、日米開戦前の国民心理の変容を最新の文献研究を紐解きながら紹介するもので、支那事変以降の市民生活の苦境が進展するにつれ開戦の心配をしていた国民の心境が開戦肯定へと揺れ動いていく様を描いている。



撮影者・写真協会、撮影年月日・1940 年 12 月 16 日、撮影場所・東京都東京市下谷区三ノ輪

4. 今後の課題

J:COM、NHK 共に保存センターの活動を周知するうえでは大きな役割を果たした。特に NHK スペシャルは多くの国民に親しまれている番組で今後も更なる続編の放送が期待される。

しかしながら、NHK スペシャルの文脈では日米開戦を肯定するに至る情報操作の戦時資料として使用された感も否めない。確かに『写真週報』はその出所からも国策プロパガンダ誌であったことは明らかである。しかし、その撮影に従事した写真家らが、必ずしも同じ気持ちで撮影をしていたという確証はない。マグナム創設の理由である「写真家の権利と自由」を JPS として担保するためには、過去の写真がどのように理解されるべきかを調査によって明らかにする必要がある。そのためにも原板の利活用と並行して保存センターにおける調査活動を深耕させることが必要となった。

(記／写真保存センター委員・寺師太郎)